

わされた肉壁はきゅんきゅんと男に吸い付いている。

そうなる、ただでさえ悩ましい感覚の<sup>ほとばし</sup> 迸る孔内が何倍もの悦楽を拾い上げ、少年を取り返しのつかない高みへと追い詰めていく。

「あ” あっ♡♡あっ♡♡あっ♡あっ♡♡いや…っいや…っつあぁあッ♡♡♡、」

ぢゅぼっぢゅぼっぢゅぼっ、と淫猥すぎる音が響き、重い突き上げに粘膜がひくりと大きく収縮し、

「あぁあぁあぁあ……ッッッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

みだりがましい悲鳴を上げながら、少年は絶頂を極めていた。

あんなに忌避しようとした男のものに、むしゃぶりつくように肉壁が絡みつく。

白蜜がびゅうっ、と勢いよく噴き出て、少年の薄い腹や胸、さらには顔まで濡らした。

続けて孔の奥、張り詰めた男が何度か大きく脈打って、

「あ”っ♡、いやあ……ッ、！！」

容赦なく熱い<sup>しぶき</sup>飛沫をぶちまけられた。

見ず知らずの男のものを注がれる嫌悪感に、絶頂の余韻も掻き消えるほどの寒

気が背筋<sup>はし</sup>を疾る。

「いや…っ！いや“あ”……！！！」

快樂によって滲んでいたはずの涙も、今はあまりの拒否感によってのそれに変化していた。

どくどくと、これでもかというほど多量の液で躰の裡<sup>うち</sup>を満たされていく。絶妙な粘度を持ったそれが気持ち悪くて仕方がないのだが、

「……あ…♡ああ……♡、」

どろどろに穢された肉洞をぬるりと男が出ていく頃には、また内壁を擦られる感覚に悦楽を感じていた。

こんなに気持ちの悪いことをされて、拒絶する心持ちより悦楽が勝ってしまう自分の躰が信じられない。

締め付けるものを失った内壁は切なげに蠕動<sup>ぜんどう</sup>し、菊状のすぼまりがはくはくと、ねだるように開閉<sup>と</sup>してしまうのを止めようもなかった。

「まったく……淫靡な躰だな」

「ひ…っ、！？」

淫神がまた低く笑ったかと思うと、不意に視界が傾いた。

少年の意思とは無関係にぐるりと躰が反転し、気づけばうつ伏せにされていた。

「このまま終わるのは勿体ない。我<sup>わたし</sup>がもっと感じやすくさせてやろう」

「……？」

淫神はまだ遊び足りないらしい。

少年は今度こそ起き上がろうとするも、やはり駄目だ。躰に力が入らない。

後ろで男たちが移動する気配がして、中年の男が少年の脚の間に屈んだらしかった。

「さて、お前の躰が感じやすいのはわかったが……、もう少しばかり敏感にさせてやろうな」

「……っ、！？」

ぬる、という感覚とともに後孔に挿入<sup>はい</sup>ってきたそれが、はじめ何だかわからなかった。

質感は硬いけれど、表面はつるつると磨かれたようになめらかに感じる。それはなんだか幾<sup>いく</sup>つも連<sup>つら</sup>なっているようで、男の指と一緒に、ゆっくりとぬかるみを犯し

てきた。

「……っう、♡…、ああ……っ、！？」

ジャラ、という音が聞こえた瞬間、まさかと思った。

「どうだい、数珠玉じゆず たまの味は？」

信じられない。

淫神は中年の神房しんぼんの手を使って、今度は長い数珠の一端を少年のなかへ入れ込んでいるのだった。

「や…っ、いやあ……っ、！、」

儀式が始まる前に神房しんぼんたちが持っているのを見たときは、まさかこんなことに使われるだなんて思ってもみななかった。

数珠玉の一つ一つはなめらかな球状けんまに研磨された木製のもので、狭い孔内にそうにゆう挿入されると、見た目に反して圧迫感を感じる程大きく感じた。

「んっ…あ……♡いや……っっ、」

数珠玉は輪状に連<sup>つら</sup>なっているなので、それらは男の指を中心に二連<sup>れん</sup>同時に挿入<sup>はい</sup>ってくることになる。

「あああ…っ♡♡、」

濡れた肉環を、大珠<sup>おおたま</sup>につるつると連続<sup>ひら</sup>で拓かれる感覚がたまらない。

両連二つの珠がそこを通過するたび、快樂に腫れぼったくなった窄まりがむりっ、むりっ、と押し拵げられ、言いようのない痺れを少年の背筋に伝えた。

「ああ…っ♡やめ……て…っ…、奥……、奥はいや……っ……っ♡、」

小刻みに全身を震わせ涙目になって訴えるも、それはどんどん深みへと埋<sup>うず</sup>まってくる。

男の指頭に押され、二列に並んだ数珠玉が着々と少年の狭路を占領してくる。

大人の指が挿入<sup>はい</sup>しているだけでも充分すぎる刺激なのに、予想だにできなかった形状のものまで挿入<sup>いれ</sup>られて、少年はなす術<sup>すべ</sup>もなく細腰を震わせていた。

「あああ…っ♡♡う…っ、♡ああ……っ、♡ああ……っ♡♡♡…っ、」

男の指が進むにつれ、つるつると位置を変える孔内の無数の珠。

酒、精液、少年の体液で存分に濡れそぼったそこをさまざまな形に拵げつつ通

過され、腰がびくびくと下品なほどに跳ねてしまう。

「ああ…っ！♡♡♡、」

先程白蜜を吐き出したばかりだというのに、前のほうが再び萌<sup>きざ</sup>しはじめている。

うつ伏せにされた状態で、今はそれは少年の腹下に収まっている。

再び熱持ちはじめた幼茎はわずかに膨張し、竿へ接している畳の目の感覚が  
つらく感じられてくるほどだ。

「ひあ…っ♡♡♡、だめ…、だめ…え……っああ…っ、♡♡」

もうこれ以上は挿入<sup>はい</sup>らない、と感じる突き当りまで数珠と指とを埋<sup>う</sup>められた。

再び圧迫感に苛<sup>さいな</sup>まれ、身じろぐのすらつらい。

ひとまず動きを止めた指に安堵する間もなく、

「ああ”あツツ♡♡♡♡♡」

ごりゅ、と躰の内奥に響くほど強い刺激に犯される。

中年男の指頭が、孔奥に数珠を擦りつけてくる。

指の動きは止<sup>や</sup>まず、ごりゅ、ごりゅ、と何度も数珠玉を最奥に押し込まれ、そのた

びに胴の中心を甘い雷<sup>かみなり</sup>に貫かれた。

「あ” あ……っ♡♡んう……っ、あああ…♡っあああ………っ！♡、」

びくん、びくん、と跳ねる細腰の奥、濡れた数珠玉が道中で複雑に絡み纏れ、媚壁に擦れるのがつらすぎる。

「どこが特に弱い？ 我わたしに教えろ」

「あああ”……っ♡♡♡♡」

毎回微妙に角度を変えながら奥を苛さいなんでくる指頭が、またわずかに引き戻る。そうして最奥の少し手前の数珠を圧迫された瞬間、一際派手に腰が跳ねた。

「ふ……、案外早く教えてくれるんだな」

可笑しさを噛むような口調で言われ、ますます羞恥が煽られる。

けれど恥ずかしいなどと感じている余裕はすぐに奪われて、

「！ああ”っ♡♡！！いや！そこいやあ……っ！ああ”♡っ♡♡♡」

少年の弱点を見つけた淫神は、狙いすましたかのように最奥付近のその箇所ばかりを苛いじめはじめた。孔の奥深くに、仰け反るほど甘い電流を何度も受ける。

男の指が動くたび、濡れた孔内で無数の<sup>たま</sup>珠がごりゅごりゅと音をさせ絶妙に位置を変えた。

淫神は失禁しそうに感じてしまう少年の弱みを刺激し続ける。

「ん”ひいい…っ♡♡♡♡やめ…、そこばっか……ああッ♡だめ…っ、だめえ…っ  
っ、！！」

「そうは言いつつ、何だこの腰は？」

「ああ……っ！♡♡♡♡」

中年男の手がぴしゃりと少年の腰骨付近の尻を叩いて、驚きのためにまた下肢が大きく跳ねてしまう。

少年の折れそうに細い腰は、もうずっと前からがくがくととめどない前後を繰り返していた。

起き上がるための力はどうしたって湧かないのに、<sup>よ</sup>好い場所を擦られたときにだけ敏感に反応し、<sup>あ</sup> <sup>か</sup>快樂の在り処を淫神に教えてしまうこの身が恨めしい。

それに――

「ひっ♡♡あああ…っ♡」

「もう回復しているのか。さすが、若い者は元気がよくて良いな」

擲揄<sup>やゆ</sup>するような淫神の口調には悔しささえ感じるが、数珠珠で弱い箇所を擦られながらも片方の手でそっと玉菊に触れられると、それだけの刺激で竿の中身を畳にぶちまけてしまいそうだった。

「どれ、もっと前のほうも揉んでやろうか」

「！！ああ…っ♡♡♡さ、触<sup>さわ</sup>らないで……っあああ……ツツ♡、」

玉菊を触っていた指が、するりと裏筋の線に添い、竿の根元に移動した。かと思えば畳と幼い肉茎との間にまで太い指をすべり込まされ、にゆくにゆくといやらしい振動を送られる。

その間にも孔奥の数珠を立て続けに<sup>お</sup>圧され、内と外、両方からの刺激に、少年はぼろぼろと涙をこぼしのたうった。

「ひあっ♡♡♡達<sup>い</sup>く…っもう達<sup>い</sup>っちゃ……ああ”あッ♡ッ♡♡♡」

「ふむ……。回復も早い<sup>だ</sup>が、射精すのも早いようだな。しかしまだ我慢しろ」

竿に送られていた刺激が止んで、

「……っ！？」

畳の目にめり込むほど瑞々しく腫れた幼茎の根元を、縛めるように輪状にした指で堰き止められた。そして数珠を残し、孔内から指だけが引き去っていったと感じた次の瞬間、

「！！っあああああっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

濡れた肉の間を、強烈な勢いで数珠玉が抜け去った。

感度を高められた肉襞を、こそげるように大玉の数珠に擦られる感覚は凄絶の一言だ。

びりびりと甘い痺れが孔を犯し、臓腑まで滲み出して脳天を突く。

「ほう、これが好きなのか」

「！！ち、違……っツ、！」

少年が慌てて頭を振る間にも、また数珠は孔内に埋められはじめている。中年男の片手で器用に、先程よりも長い距離をなかに容れられてしまった。

「いや…、いや……、ああ…♡、」